遺跡に学ぶ

守ろう　群馬の文化財

第34号

学ぼう　群馬の歴史と風土

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
http://www.gunmaibun.org/

3 -2010

これってなんだろう　●貸出教材を授業に活かす

発掘情報館の教材貸し出し（打製石斧と磨製石斧編）

主任調査研究員　須田　正久

打製と磨製

縄文時代の代表的な石器に“石斧（せきふ）”があります。教科書や資料集にも必ず掲載されているため、目にすることも多い石器だといえます。

この石斧と呼ばれる石器には、打製と磨製のものがあるのはご存じでしょうか。打製石斧と磨製石斧といわれていますが、それぞれ用途が異なる石器なのです。

●打製石斧は、棒状の柄に結びつけて土を掘るための“土掘り具”として使われたものです。今でいえば“スコップ”です。

●磨製石斧は、全体が良く磨かれた石器で、木製の柄にはめ込んで木を切り倒すための“伐採具”として使われたものです。本来の意味の“斧”といえます。

さて、このような石斧から、どんなことが想像できるでしょうか。

・打製石斧とは

土掘り具である打製石斧は、土を効率的に掘るために作られたものです。竪穴住居や落とし穴、貯蔵用の穴などを掘るために必要だったのでしょう。竪穴住居を造ったり、食べ物を貯蔵するための穴を掘ったりするのは、その場所に居住することが目的たっだはずで、定住が行われたことがわかります。また、土中の根茎類を掘り出すためのも使用されたことも考えられます。食料メニューが増加し、より安定した食生活を約束することにも、打製石斧は貢献したことでしょう。

・磨製石斧とは

伐採具である磨製石斧は、太い木材が必要なことから作られた道具です。それは、太い柱材を用いた家を作ったり、丸木舟を作ったりということだと思います。太い柱で組まれた竪穴住居は、やはり定住生活が行われたことがわかります。また丸木舟は、河川ばかりか海での利用も行われたことがわかります。魚介類の利用が盛んになることは食生活の安定に大きな役割を果たしたことでしょう。さらに、海上交通の活発化は各地の縄文人の交流も盛んになったはずです。各地で出土する土器や石器からも、交流の様子が裏付けられてもいます。例えば、新潟県姫川に産出する翡翠（ひすい）が、日本各地から出土することも、その一つだといえます。

このように、打製と磨製の石斧は、縄文時代の生活の様子を読みとることが可能な教材だということができるのではないでしょうか。

実物教材としての活用

打製石斧と磨製石斧は、それぞれ用途が異なる石器ですが、写真でみるとその違いがよくわからないかも知れません。しかし、実物を見て、さらに触れてみると一目瞭然！！

その違いが一瞬にしてわかるはずです。そして、打製と磨製の違いばかりかではなく、用途の違い、そしてそこから社会の様子まで想像でき、実感もできるのです。

授業のなかで、ぜひ実物教材として活用してみませんか。

さあ、本物の石器から、直接歴史や社会を実感してみましょう！！

実物教材の利用については、発掘情報館へ相談してください。

変化する社会の中で

八ッ場ダム調査事務所　調査研究部長　中沢悟

私は今年で58歳になる。事業団で働き始めて30年が経過した。まだまだ若いつもりであるが、生活の中で社会の変化を見てきた。

小学校入学以前の事であるが、自宅の裏山で炭焼きをしている人がいた。今でも裏山には、数カ所炭窯を築いた跡がある。小学校１年生の同級生で、父親が炭の検査員をしていた優秀な友達がいた。炭の需要の減少とともに、小学2年生になると引っ越ししていなくなった。木炭は昭和32年頃全国で200万トン以上生産されていたが、昭和48年になると灯油等の使用が増大して年間8万トンと急激に減少している。

昨年の公開普及デーで、長野原町東宮遺跡から出土した江戸時代の下駄の展示を経験することになった。下駄について興味を持ち骨董市で古い下駄や下駄を造る工具を買い、自分でも造ってみた。その下駄も昭和30年代の年間5600万足の生産をピークに、洋装化と靴の普及で急激に需要が減少して生産が減っていった。

昭和30年代までは、自宅周辺での金持ちは、すなわち山持であった。山持ちが山に木を千柵千本植えておけば、毎日その木が育って山持ちはさらに豊かになっていく、そんな話を聞いたことがある。だが今山の木は売れないでお荷物になっていると聞く。

現在私は、八ッ場ダム調査事務所で八ッ場ダム建設関連の埋蔵文化財発掘調査や報告書作成に関する仕事をしている。ここに赴任した5年前は、発掘と整理が継続的に大きく実施されており、今後も同じような事業が継続されると思っていた。しかし政権交代により、ダム建設中止が言われ、情勢が大きく変化している。

昭和53年は、群馬県において大きな開発がこれから本格化する時代であった。それに対応するために、埋蔵文化財調査事業団が設立された。創立当時事業団の職員は16名であった。毎年職員が増加して、4年後の昭和56年には、53名となり、北関東自動車道の発掘調査が盛んな平成16年度では、132名となっていた。その後減少して創立30年が経過した現在の職員数は67名である。今後社会の動きの中で、どのようになるのかわからないが、職員数が100名を超える時代はもう来ないと思われる。

社会は、確実に変化していく。それは長い歴史が物語っていることであり、その変化にそれぞれの時代の人は努力して対応してきた。今後の30年とは一体どのような時代になるのであろうか。大河ドラマ龍馬伝を見ながら、大きく変わろうとしている時代の変化とそれに対応していく社会に興味を持っているこの頃である。

ここがすごい！群馬の考古資料　江戸時代編

主任調査研究員　篠原正洋

天明泥流の下から発掘された村々

□浅間山噴火と「天明泥流」

浅間山は群馬県と長野県境に位置する標高2568mの活火山である。浅間山は約9万年前に黒斑山（くろふやま）が活動を始め、2.4～2.1万年前に山体崩壊を伴う噴火活動に至った。この時発生した泥流は、吾妻川から利根川を流下し、現在の前橋市街地の下に約15mの厚さで堆積している。その後、1万年前頃から前掛山（まえかけやま）の活動が始まり、その噴火により4世紀代、天仁元年(1108年)、天明三年(1783年)に噴火した軽石等が、その時代の遺跡を覆っていることが発掘でも明らかになっている。そのうち、天明三年(1783年)の噴火活動は、有史以来の記録的な火山災害とされている。噴火は新暦5月9日に始まり、8月5日の大噴火で終息に向かう3ヶ月間の出来事である。この時の噴火の経緯は以下のように集約されている。

「5月9日に最初の噴火があった。6月25日(26日)の降灰、7月17日の北麓への軽石降下。7月26日から8月2日にかけて噴火の強さは次第に増す。8月2日の夜は特に激しく、南東麓の村では、3日になって逃げ出すものがあり、午後の噴火は規模がさらに大きくなって、絶え間ない爆発的な噴火が続いた。

4日には北東麓へ吾妻火砕流を発生させたが人家へは到達せず、一方、長野県側では大粒の軽石が降下し、人々はパニックを起こすようになる。そして群馬県側では運命の8月5日の災害を迎える。」

8月5日の昼前の噴火に伴って発生した火砕流は、土石なだれ(岩屑流（がんせつりゅう）)に変化して旧鎌原村を呑み込み、吾妻川に流れ込む。その後、土石なだれは泥流へと変化し、吾妻川流域の集落や田畑を埋め尽くしながら、利根川に合流し、銚子沖の太平洋及び、江戸川を経て江戸湾へも流れ下った。犠牲者の数は約1500人。これが「天明泥流」である。

現市町村名	旧村名	人数	流死数	家数	流失数
嬬恋村	鎌原村	597	466	93	93
	大前村	452	27	81	81
	西久保村	160	54	40	40
	中居村		10		29
	赤羽根村		14		33
	芦生田村	183	16	43	43
	袋倉村		17		23
	半出来村		40		27
長野原町	小宿村	290	149	60	60
	羽根尾村	253	27	63	63
	古森村		14		13
	立石村		12		7
	坪井村	140	8	30	21
	与喜屋村		5		8
	新井村		2		6
	長野原村	428	152	71	71
	林村		18		11
	川原畑村		4		21
	川原湯村	74	14	31	19
東吾妻町	横谷村	134	9	35	24
	松尾村	454	3	116	6
	岩下村		4		14
	三嶋村		13		57
	矢倉村		11		20
	厚田村		7		19
	原町			229	24
中之条町	青山村		10		15
	市城村				21
渋川市	村上村		1		13
	小野子村		2		12
	南牧村	101	5	24	24
	北牧村	736	52	71	135
	祖母島村			120	27
	川島村	768	113	168	127
	中村	418	20		
	半田村	787	9	191	42
玉村町	上福島村			101	24

※根岸九郎左衛門「浅間山焼に付見分覚書」及び、富沢久兵衛「浅間記」による。

天明三年浅間山噴火活動と天明泥流流下の様子

□発掘された三島村（みしま）　-上郷岡原（かみごうおかはら）遺跡-

平成14年度に実施された発掘調査により、当時の三島村の一部が姿を現した。北側の吾妻川寄りに主屋2棟、納屋及び便所5棟の建物が見つかり、周囲には広大な畑が広がっていた。村の特産物である「麻」が耕作されていた可能性が高い。また、一部には水田も見つかっている。天明三年当時の水田は吾妻渓谷より上流の町村では現在のところ発掘調査では見つかっていない。

上郷岡原遺跡全景（上）と想像図（右）

□発掘された川原畑村（かわらはた）　-東宮（ひがしみや）遺跡-

平成19･20･21年度に実施された発掘調査により、当時の川原畑村の一部が姿を現した。7区画の屋敷跡の中に、主屋6棟、付属建物8棟、酒蔵と考えられる建物1棟が見つかった。上福島村の場合、同一区画(屋敷)の中に主屋などの建物と広い畑が配置されていたが、ここ川原畑村では、建物を主体とした屋敷が旧道沿いに密集して建ち並び、畑は集落から距離を置いた場所に広く耕作されている。

また、保水性の高い厚さ1mにも及ぶ天明泥流に埋没していたため、桁行約20m×梁行約12mの大型建物が通常では腐って残らない建築部材(土台･床板など)とともに出土した。これは当時の建築様式や生活様式を解明できる貴重な資料だ。

その他、地域の伝承にも残る「酒蔵」跡も見つかった。酒蔵の内部には、酒を搾る施設(槽場(ふなば))跡と思われる遺構もあり、今後、地方村の暮らしの様子が解明されるであろう。

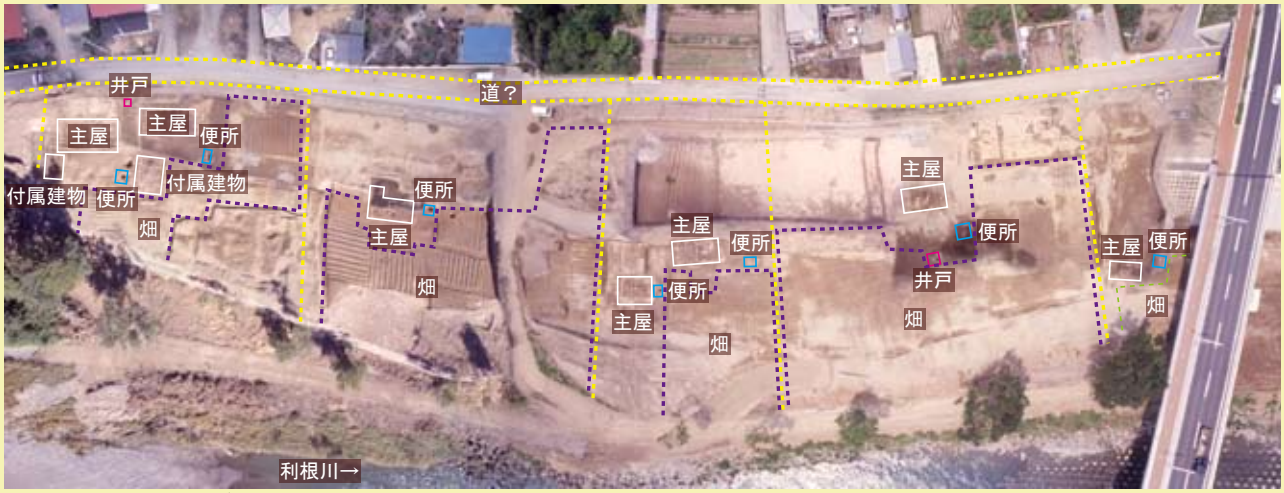
東宮遺跡「酒蔵」全景

建物内部の「槽場」

東宮遺跡大型屋敷跡全景及び構成

□発掘された上福島村　-上福島中町（かみふくしまなかまち）遺跡-

平成13年度に実施された発掘調査により、当時の上福島村の一部が姿を現した。東西に走る道と利根川との間に南北に区画された地割り(屋敷)の中からは、主屋や便所、道や畑が見つかった。主屋は平屋で屋根は入母屋造(いりもやづくり)。便槽として桶を埋めた便所が建てられている。畑は屋敷の南側(川側)の広い敷地に耕作され、里芋や大豆が自給されていたと思われる。村の中には共同で使用されたと思われる井戸も2ヶ所見つかった。



上福島中町遺跡全景及び集落の構成

参考文献 318, 319, 410 集 当事業団調査報告書

くらべてみよう！縄文時代の服装と弥生時代の服装

主任調査研究員　橋本淳

鹿の皮でつくった服

狩猟・採集を生業とした縄文人は、獲った動物の皮も衣服の材料として利用していたと考えられる。造形的な土器をつくった縄文人は、衣服にもさまざまな模様・飾りを施していたのだろう。

編布（あんぎん）で織られた服

カラムシなどの植物性繊維を編んだ衣服を着ていたことも、出土遺物から確実視される。

（福島県立博物館）

衣服をまとった？土偶

（提供 東北歴史博物館）

縄文時代、弥生時代ともに衣服が完全な状態で遺跡から出土した事例はない。しかし衣服の材料と思われる布片は見つかっており、その布片を頼りに当時の衣服が復元されている。縄文時代は、縄文人をかたどった土偶も参考になる。弥生時代には、中国の史書『魏志倭人伝』に「男子の衣は横幅、ほぼ縫うことなし。婦人はその中央をうがち、頭を貫きてこれを着る」という記述が見られ、頭からかぶる貫頭衣のような衣服が推定されている。

弥生

身分の高い人の服

弥生時代になると絹が日本に入ってくるとともに、機織りの技術も伝わった。染色技術も発達し、紫や青、朱、緑青などさまざまな色が使われるようになった。写真の下半衣はあかねで染められている。

復元された平民層の服

縄文時代と変わらず、麻でつくられていたようだ。機能性を重視し、シンプルである。

出土した絹織物片
（佐賀県吉野ヶ里遺跡）

『群馬の遺跡3』の読みどころ

群馬の遺跡３＜弥生時代＞

上席専門員　大木紳一郎

シリーズ『群馬の遺跡』の第３巻は、縄文時代に続く弥生時代を取り上げています。「弥生時代」の印象を子供達に聞いてみると、原始人を思い浮かべる旧石器時代～縄文時代や巨大なお墓の造られた古墳時代とくらべて、極めてあいまいなイメージしか浮かばないようです。それはおそらく、時代の変化を歴史の流れのなかでとらえていないことに要因があるように思います。人類史のなかで「狩猟・採集社会」から「食料生産社会」への移行は、「火の利用」や「道具の使用」とならぶ最大の革命的出来事と考えられています。弥生時代はまさにその大変革の時代であったわけです。コメ作りをきっかけに始まった弥生文化は、現代にまでつながる日本的な生活文化の基盤となったといってもよいでしょう。

本書では「弥生土器」、「稲作」、「弥生人」、「弥生墓」の４項目について最新の考古学の研究成果を紹介しています。

群馬の弥生土器は、縄文土器の伝統に東海地方の土器の影響が加わって誕生したことがわかっています。このことから、東海地方からの人やモノの移動が群馬の弥生文化誕生のきっかけになったと考えられます。また、群馬の弥生土器を飾る複雑で幾何学的な文様は、やがて「櫛描文（くしがきもん）」という流麗で簡素な文様に大きく変わります。その特徴は長野県の弥生土器と共通することから、この時以来、長野と群馬が一体となった土器文化圏が形成されたと理解されています。土器の研究は生活様式の復元だけでなく、地域社会の成り立ちを解き明かす鍵にもなることを示しています。

日本に稲作があったことの重要な証拠となったのが「稲籾（いねもみ）」と「水田」です。昭和52年、関越自動車道建設に伴って発掘調査が行われた高崎市日高（ひだか）遺跡で弥生時代終末～古墳時代初頭の水田が発見され、東日本では「登呂（とろ）遺跡以来の大発見」として大きなニュースになりました。その後、群馬の弥生遺跡からこげたコメ、アズキ、ダイズなどの収穫物がぞくぞくと見つかり、また専用農具などの発見もあって、弥生時代の群馬県で農業が営まれていたのが間違いのない事実であったことが証明されました。本書では、農業に関連する遺跡と出土品を紹介しながら、弥生農業の具体像について分かりやすく解説しています。

発掘調査で発見される墓からは、当時の人びとの抱いていた死生観や、葬られた人物の生前での役割などを知る重要な証拠が隠されています。群馬の弥生遺跡では、死者を葬ってしばらくしてからいくつかの骨や歯を選び土器に納めた上で再び葬るという「再葬墓（さいそうぼ）」の風習や、方形や円形に溝で囲んだ「周溝墓（しゅうこうぼ）」といった特有の墓が発見されています。群馬の弥生遺跡では、鉄剣や金属製ブレスレット、ガラス玉製首飾りなどの貴重品が限られた墓で発見されることから、すでに弥生村のなかで特別扱いを受ける人物がいたことがわかります。その代表例として渋川市有馬（ありま）遺跡を取り上げ、死後世界を守る祖霊とも解釈される人形土器とともに弥生人と墓の関係について詳しく取り上げてみました。

弥生人は縄文人に比べて、背が高く、面長でのっぺりしていて一重まぶたといった特徴がある、とよく言われます。ただし、これは大陸渡来系弥生人と在来系縄文人の人骨比較からいえることのようです。形質人類学者の楢崎修一郎さんが群馬県で発見された弥生人骨を調べたところ、両方の特徴をもつ人骨が混在していることが判明しました。同じ弥生時代の西日本の例と比較して、在来縄文系が多いといった結果もわかっています。群馬の弥生人といっても、異なる人種ではなく、渡来系弥生人の血を交えた在来系縄文人の血統を引く人々が中心だったといえるでしょう。本書では、人種的特徴のほかに抜歯風習や殺傷痕跡などにも言及し、群馬弥生人骨の最新研究成果について解説しています。

『群馬の遺跡4』の読みどころ

群馬の遺跡４＜古墳時代Ⅰ【古墳】＞

主席専門員　徳江秀夫

「しのぶ毛の国二子塚」と「上毛かるた」にもうたわれている群馬県は、奈良・大阪・宮崎などとともに全国でも多くの古墳が造られた地域の一つとしてよく知られています。

1935（昭和10）年に行われた古墳分布調査の結果をまとめた『上毛古墳綜覧』には8423基の古墳が記録されています。実際には群馬県内に１万２千基以上の古墳が造られたものと考えられます。その中には東日本で最大規模を誇る太田天神山（てんじんやま）古墳や多彩な内容の人物埴輪や動物埴輪の立て並べられた保渡田八幡塚（ほどたはちまんづか）古墳や塚廻（つかまわ）り古墳群など全国的にも著名な古墳が数多く含まれています。

そういった群馬県地域の古墳について中学生・高校生を対象にその理解を一層深めてもらうことを目的の一つに編集されたものが本書です。2004（平成16）年に刊行されてはや６年がたちました。編集に携わった者としては、古墳造りと渡来人あるいは渡来系の人々との関わりの深さや県内各地に造られた小円墳からなる古墳群についての記述もあればより良かったのではと思うこともありますが、各章の構成、その内容については群馬県内の古墳の特徴を漏れなく伝えるものとなっており、現在も大きな変更の必要はないものと考えています。

本書の構成は、

第１章　古墳時代の群馬は元気だった－群馬考古学入門－
第２章　豪族居館の発見
第３章　埴輪と古墳と古墳時代
第４章　巨石横穴式石室と豪華な副葬品
第５章　多田山の唐三彩（とうさんさい）が語る歴史
第６章　群馬における古墳研究の歩み
付　章　学習への誘い（古墳調べをする人のために他）となっています。

第１章は、群馬古墳学入門というサブタイトルがついているとおり、群馬県内の古墳の特色についてわかりやすく概説しています。教科書では大和政権を中心とした近畿地方の古墳の動向を中心に古墳時代についてその記述が進められていますが、この章を読めばその大和政権との歴史的な関係をきちんと踏まえた上で、群馬県の古墳時代が東日本屈指の有力地域となったことが充分に理解されることでしょう。まずはこの章を読み通してみていただきたいと思います。

第２章では三ツ寺（みつでら）Ⅰ遺跡の調査を通じて豪族の開発拠点としての「居館」の構造とその内部で行われていた水に関わるマツリゴトの様子が調査担当者ならではの視線から描き出されています。

第３章では埴輪について取り上げました。昨年の夏、群馬県立歴史博物館では埴輪展が大々的に催されました。この章を読めば古墳に埴輪が立てられた意味について知ることができます。

第４章では高崎市の綿貫観音山（わたぬきかんのんやま）古墳を通じて６世紀後半に造られた大型前方後円墳、地域の豪族の墓の特色について紹介しました。５世紀後半に造られた高崎市（旧群馬町）の保渡田八幡塚古墳の墳丘や埴輪、埋葬施設との比較を通して古墳の特徴の変化を理解することができることでしょう。

第５章では唐三彩を出土した伊勢崎市（旧赤堀町）多田山（ただやま）12号墳を題材に、前方後円墳の築造が終わった後の時期、７世紀に造られた有力者層の古墳のあり方や多田山12号墳に唐三彩をもたらした人物にまで話がおよんでいます。

以上が本書、群馬の遺跡〈古墳時代Ⅰ【古墳】〉のぜひ読んでいただきたいところです。

『群馬の遺跡』全７巻
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編　上毛新聞社発行
定価　各巻　1300円（税込）
お求めは書店または上毛新聞社取扱新聞販売店まで
〈写真〉群馬の遺跡３・弥生時代
群馬の遺跡４・古墳時代Ⅰ【古墳】

「古代のうつわ　ー須恵器ー」を見に来ませんか

主任調査研究員　斉藤聡

中学校の歴史教科書に必ず登場する「須恵器」。みなさんは実物を見たことがありますか？
現在、群馬県総合教育センター（伊勢崎市今泉町）２階の教育資料展示コーナーで『古代のうつわ－須恵器生産と変容－』と題して、群馬県内の遺跡から出土した須恵器を多数展示しています。

●『古代のうつわ－須恵器生産と変容－』展示コーナーの様子

●復元された須恵器窯（吹田市博物館提供）

須恵器はそれまで作られていた土師器とはちがい、登り窯を使って高温で焼かれた硬質の土器です。５世紀の初頭に朝鮮半島から伝来し、５世紀後半には地方での生産も始まりました。

●光仙房（こうせんぼう）遺跡（伊勢崎市三和町）の須恵器窯

群馬県でも５世紀後半には生産が始まったと考えられます。そして、奈良時代から平安時代にかけて、県内各地で盛んに生産されるようになりました。

●古墳から出土した須恵器

当初の須恵器は高級品であったため、豪族など一部の人しか使うことができませんでした。古墳時代の須恵器は集落からはあまり出土せず、多くは古墳の副葬品として出土しています。

●銅鋺を模倣した須恵器

6世紀半ばには朝鮮半島から仏教とともに金属器が伝わりました。しかし、金属器は高度な製作技法を必要としました。そこで金属器の形を模倣した須恵器が作られるようになりました。

●いろいろな陶硯

須恵器にはうつわ以外の製品もあり、その代表的なものが硯です。現在、硯といえば石製ですが、飛鳥時代から平安時代前期にかけては主に須恵器製でした。

●灰釉陶器とそれを模倣した須恵器

平安時代に入ると白磁や青磁の影響を受けた灰釉陶器や緑釉陶器の生産が始まりました。すると今度は、これら陶器の影響を受けた須恵器が作られるようになりました。

●終焉の須恵器

平安時代に入ると須恵器は庶民の器として普及し、鉄製の釜を模倣した羽釜なども作られるようになりました。しかし、10世紀の終わりから11世紀の初め頃、須恵器は姿を消してしまいます。

『古代のうつわ－須恵器生産と変容－』展は、群馬県総合教育センター開館中いつでも自由に見学していただけます。この機会に是非、本物の須恵器を間近でご覧になってみてはいかがでしょうか。

また、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団では遺物の貸し出しも行っています。学校の空き教室などを利用してあなたの学校でも『遺物展示会』をしてみませんか？　当事業団の職員がお手伝いします。詳しくは(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課(Tel.0279-52-2513)までお問い合わせください。

お知らせ

古代体験　火おこし体験のお知らせ

子ども達の中には、火を見たことのないという子もいるのではないでしょうか。生活が便利になるに従って、火を目にする機会も少なくなってきています。

今回ご紹介するのは、火おこし体験です。子ども自身が体験して、学習しやすい舞切り式という方法を用います。木と木とをこすりあわせることで生じる摩擦熱で火を起こします。学校で行う際には、５、６人１グループで、交代しながら火をおこします。５、６人1グループで、１人2回体験ができます。火おこし体験に興味のある方は、

発掘情報館(電話 0279-52-2513)　までご連絡下さい。

また、5月2日(日)からは、「親子で日曜考古学体験　火おこし体験」を行います。ご興味のある方は、ご参加下さい。

親子で日曜考古学体験　火おこし体験

◆期　間　5月～6月、10月～11月、2月～3月の毎週日曜日

◆時　間　13時～14時

◆費　用　１セット(5～6人) 200円

最新情報展第1期展示会

当事業団で発掘された出土品の中には、みごとな造形美をもつ石器や、高い芸術性を感じさせる土器など、展示施設を見ていてふと立ち止まってしまうようなきれいなものがたくさんあります。そのようなきれいなものを中心に展示を行います。

また、夏休みには、展示と関連した企画として「あなたのお気に入りコンテスト」を行う予定です。詳細は、夏休み企画「夏休み親子宿題教室」のチラシにてお伝えします。

◆展示期間　平成22年5月16日(日) ～ 8月29日(日)

表紙の写真
発掘情報館《午後の古代体験教室　縄文土器づくり》の作品を野焼きした様子

本誌は、学校および教職関係者向けの埋蔵文化財情報誌です。ご意見、ご希望、ご質問などは群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課
TEL　0279-52-2513
FAX　0279-52-2904　までお寄せください。

「遺跡に学ぶ」第34号
平成22年3月23日発行
編集・発行　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田784-2
☎0279-52-2513（普及課直通）